

過去の栄光や成功体験に固執しない人達、もろ手を挙げて賛辞を贈りたい人達である。

その人 1；岡田武史氏（図-1）

平成 13（2001）年当時、サッカー J 1 北海道コンサドーレ札幌の岡田監督の言葉である。「マンネリ化した自分を感じ、新しい発想がひらめかない」として辞任した。



図-1

その人 2；女優の葉月里緒菜（図-2）

2000 年頃の話だったか？ 葉月さんのことに関心があったのではなく、離婚を突き付けたその精神である。「温厚で欲のないところが大好きだった、でも、向上心のないところが嫌いになった」として離婚を通告したのだ。



図-2



図-3

その人 3；松井秀喜氏（図-3）

大リーグのヤンキースなどで活躍した松井秀喜選手が日本時間の 28 日午前 7 時すぎから引退の記者会見に臨み、「10 年前に大リーガーメジャー（ヤンキース）に挑戦する時に、命懸けでプレーして力を発揮すると言って、それから 10 年プレーして来た、しかし、今シーズン、大リーグでプレーする機会を貰ったにもかかわらず結果が振るわなかった」と引退を決断した理由を述べている。



図-4

その人 4；酒井雄哉氏（図-4）

比叡山延暦寺「千日回峰行」を 1980 年と 1987 年の 2 回満行した天台宗北嶺『大行満大阿闍梨』——が、その著書「続・一日一生」の中で話された言葉である。「……いろんなことも経験した。でも、それはすべて過去の話、これからどうやっていくか、前のことは忘れて、年齢とかそんなものは関係ない、これから、明日から何をすべきか、どうしていくか、……」

普遍的な実績残して、成功体験にしがみつけない



山形新聞

2024(R6)/10/1

大谷 54本塁打 130打点 2冠確定



ロッキーズ戦の8回に右前打を放つ米大リーグ、ドジャース・大谷。レギュラーシーズンを終え、本塁打王と打点王の2冠を確定とした。||デンバー(共同)|

大谷翔平の今季打撃成績

本塁打	54	1
打点	130	1
打率	.310	2
得点	134	1
安打	197	2
盗塁	59	2
塁打数	411	1
OPS	1.036	1

●はナリーグ内の順位。OPSは出塁率と長打率を足したものを示す。

「デンバー共同」米大リーグは29日、ナ・リーグの1カードを除いたレギュラーシーズン最終戦が各地で行われ、ドジャースの大谷は54本塁打、130打点で2位に大差をつけて終え、2冠を確実にした。

レギュラーシーズン終了 自己最高の成績

した。デンバーでのロッキーズ十回、0-3で敗れた。タイ

る活躍を見せた。ただ大谷は確実となった2冠に目を向けず「ここから先はシーズン中に積み上げた成績や数字は意味がない。気持ちを切らさずに過ごしていきたい」と断言。10月から初のプレーオフ

伝説の

大谷翔平 三冠王

図-6

シーズン中図-6のとおり素晴らしい成績(結果)を残したにも係らず、2冠に目を向けず「ここから先はシーズン中に**積み上げた成績や数字は意味がない**。気持ちを切らさずに過ごしたい。」と言われた。何とすごいことではないのか、決して成功体験に拘泥、自惚れていない。

.....

ところで皆さんの言葉に刺激されて浮かぶこと。

その1; オリンピックのことである。勝ち負けはともかくとして、吾が国内で「金メダルを取る」とあらゆるメディアに露出して宣言する、そうなれば社会的公約である。また、強化合宿などの費用に対して相当・多額の税金を投入しているのだ、選手は税金(大金)を享受しているのだ。しかし、「金メダルを取れなかった。」有望と言われながら予選敗退者もいる。私は厳しいバッシングを覚悟で言うと、「税金を返せ!」と叫びたい。あるいは現地で吾が国民に謝罪し、即刻引退を宣言すべきなのである。もちろん、本気で言っているのではない。しかしである、「金メダルを取る」という闘志は、決意は自分の心の中で叫べばよいことであって、マスメディアに向かって声を叫んで強調する必要はないだろう、別の言い方はないのか。我が国には生活困窮者が大勢いるという社会問題があるではないか。生活困窮者自立支援法という法律まで作り、生活困窮者を定義しているのである、社会的

弱者などという言葉もある。就労や心身の状況、地域社会との関係性その他の事情により、現に経済的に困窮し、最低限度の生活を維持することが出来なくなるおそれのある者をいう。こちらにも税金を投入しているのではないかという声もあろう。それでは、こういう当事者はマスメディアに顔と実名を以ってそれらの窮状を直接的に訴えることが出来るのか、そのような社会環境なのか。片や“金メダルを取る”と豪語した者達とは社会的身分が違うとならないのか、人的作為による格差・差別社会の露見である。「金メダルを取るとマスメディアで豪語し、結果、金メダルを取れなかった者よ、恥を知れ恥を！」と言いたくなる。私はここでは自然に湧き上がる言葉を以って率直に書いており、SNS に投稿する気はないが、人間万民に根付いている性である、ただ、表で、他人の前で声を発するかどうかだけである。しかし、世の中には我慢出来ずに SNS に投稿する人が必ずや出現し、誹謗中傷だと騒動が起きるが、度を越えたものはもちろんご法度であるが、そうでなければ社会問題と捉えるべきである。そして、オリンピック選手として参加した者には、帰国後、一定期間（通算 30 日以上）の無償ボランティア労役奉仕に従事させるべく法制化すべきである。

大谷翔平選手や藤井翔太さんは戦う前から豪語するか、しない！ プロスポーツを職業とすることにおいては、全ては結果というのではないか、結果を出してから自慢すればよいのである。

その 2；過去の栄光にどんな意味があるのか？ その時、その一定期間は輝いたのである。それではその人は今何をしているの？ 心身はどんな状態なのか？ 過去に何々をやった、だから自慢する、偉いと思うのは自惚れた勘違いの態度、当時と同じことを今やっていなかったら回顧に過ぎない、個人の胸の内では如何様であろうがそれは自由勝手である。ところが、2：6：2 の自然原理で 2 割は、一般社会で鼻にかけるのがいる、実にみつともない者がいる。過去の栄光が血肉となって、今にその人間味に現れ、地域の人々の道徳を感化し、地域の淳風美俗に教化して行くというのが、活きた、生きている過去の栄光となるのではないだろうか。

その 3；私事に係る些末なことだが、会社現役時代の肩書は取るに足らないことから、今は何も記述する必要は無い。例えば「課長」という役職名は日本中集めれば数多ある、その業務内容・職責も千差万別、だから、課長になったとか、部長になったとか、社長になったとか、そんな役職名・肩書に軽重がある訳は無い。

図-7、定年退職以降 75 歳の今日までの 15 年間、全国の主要な歴史街道・歴史古道や四国へんろ、その他の歩き旅を楽しんで来た。中でも特に多くの人が行きたくともなかなか行けない四国の歩きへんろを 4 回（通算 4 年間、現地滞在 203 日間）行って来たが、出発前には親しい知人・友人も含めて誰にも知らせないで来た、現地でも掛かって電話相手にも知らせないで来た。取材を受けたからといって格別のものではないし、スポーツのみならず人生全ては結果であると決めていた、決めている。プロセスも大事であろう、だとすれば**結果を踏まえてから、結果に即して話題に出せばいいことだ**。私からすれば至って自然なことである。

その 4；学校教育でも、社会教育でも、徳行啓発でも「有限実行」というのではないか、それを破つた者は嘘吐きだろう、詐欺師だろう、ペテン師だろうとならないのか、極論だが。

例えば、オリンピック水泳競技で金メダルと取った人と、人間国宝歌舞伎役者と、どちらが人間的に立派なのか、どちらが社会貢献度は高いのか、そんなことは決めようがないのとは当然なのである。もちろん、過去のそういう人達とも優劣を比較出来ない。国の勲章・褒章制度についても一言、

国会議員政治家が多いという印象——過去に授与された政治家人数の具体的統計データは公表されていない——を持つが、みな、過去の一過性のことなのだ。



図－7

前記の取り上げた5人は、自分に厳しい責務を課している。常に向上心を求め、他人に嘘をつかない、過去の成功体験にしがみつかない、過去の成功体験について非常に自制的に熱く語っている。みんな潔い良い言動である、何と素晴らしいことか、その意志に感激する。社会的身分の高い人、コミュニティにあっても「何とか長」の付く人に対するお手本の生き様である、見習え！ 私もこんな心を持った人達のような人間になりたい！

- ・「吾が国で一番醜い、節操のない、品のない、嘘つき政治家連中に煎じて飲ませてやりたい！」
- ・地域コミュニティにも過去の成功体験や栄達を引き摺り、大威張りの佞奸根性野郎共が蔓延っているが、このような輩にも煎じて飲ませてやりたい！

世の後期高齢者に問いたい。昔、社長であった、課長であった、オリンピックで金メダル取った、〇〇議員をやった、〇〇で文化勲章貰ったとかの過去の栄誉・名誉、過去の成功体験は糞くらえだ！死んだら価値の計りようがない、生きている人の価値はこの今何をしているか？である。それらの現役であれ、リタイヤした者であれ、**生きている人の価値を問うべきは、社会還元のために、経歴・経験を活かしつつ無償精神を以ってこの今何をしているか？**である。過去の成功体験を鼻に掛けて威張り散らしているようでは朝露の如くだ。無償精神を強調するが、労働を提供しその対価を得ている、つまり、労働賃金を得て社会貢献というのであれば契約に基づくものであり、それは等しく当然の社会貢献と言えよう。そういうことが問題ではなく無償精神を持った労働（労務提供）か否かをテーマとしている。

(end)